

はじめに (1)

自然文化誌研究会（愛称学大探検部）は創立 50 周年を迎えることができ、創業者の一人としてご同慶の至りである。人生は思い通りにはいかず、紆余曲折があっても、一途の想いをもって何とか苦難を耐えて、道を補正しながら、楽しく幸せな平穏の日々に至りたい。小学生の頃から思い描いていた人生の大方が満たされて、おおかた吾唯足るを知ることだ。

多くの師友、先達、身近な家族に支えられて、栽培植物の起原と伝播の研究という趣味に明け暮れたと言え、まるで自己中、能天気な奴に分類されてしまうだろう。祖父は陸軍に徴兵されシベリア出兵、父は海軍に徴兵され、軍港呉の周辺で松根油を掘っていたそう。軍隊だけがこのくにを護っているのではない。趣味の学問と言いつつ、学術探検もかなり命懸けの職業で、友人は熱帯病、事故などで何人も死去している。教えを乞うてきた篤農の皆さんや師匠・先達も、軍隊生活での戦闘に加えて、酷い飢餓を経験してきた。

僕はこうした先人たちの経験を貴重資料として引き継いできた。彼等からタネを切らしてはいけないという厳命がありながら、京都大学学術調査隊や自然文化誌研究会ほかで収集した栽培植物の種子を含めて約 1 万系統の研究材料を、東日本大震災の際に計画停電と放射性物質を避けるため、イギリスの王立キュー植物園に急遽移管した。これは絶望的な行為であったが、日本では見捨てられた内外の在来品種が保全できたので、キュー植物園には深く感謝している。

一方で、東京学芸大学は伝統的には教員養成を主目的にしてきた古い大学である。農業教育、環境教育は義務として、実践研究および理論研究をせねばならなかった。連合大学院で博士号まで授与する教授としては、高度な教育哲学の学術研究を自ら求めた。また、学びを深められるように教材の研究開発も行った。たいそう複雑な仕事である。年休はほとんどとらず、週末も研究作業や学生・市民向けの教育実践に過ごしてきた。

こうして、自然文化誌研究会とともに日々の各種鍛錬をしながら、多くの個人活動や集団活動の成果を蓄積してきた。その技量を信頼して、子供たち向けの冒険学校や農学校、教員・市民たち向けの講習会、教育プロジェクトを実行してきた。ここに、高い誇りを持って、50 周年の事実記録を公表する。これからも、地道な活動に、多くの方々が関心を寄せてくださり、ロコミで参加し、ご援助いただければありがたい。自然や生業を学び、自然知能 Nin により、心の構造と機能を豊かにするように、一緒に鍛錬し、豊かで幸せな暮らしを、近未来に再生しよう。

木俣美樹男



ウズベキスタンのスタイリストたちと（木俣撮影）

自然文化誌研究会創立:1975～1990 年

東京学芸大学に助手として就職したのは1974年である。東京教育大学大学院の指導教授であった西川五郎先生たちからは人生の坂道を上るための重荷「骨を埋めるつもりで、日本の農業教育を再建せよ。」と教示をされて、東京学芸大学に送り込まれたのである。

阪本寧男先生には、穀菜食による長寿で有名な上野原町桐原に行き（1974年秋）、東京で就職するのならここをフィールドと決めて文化人類学の野外調査の練習をせよと教唆された。そこで、「自然誌研究会」を創って、学生たちを募って調査するとお答えした。それなら、「自然文化誌研究会」とした方がよいと助言された。これが、東京学芸大学探検部の一源流になった（1975年春）。学内に募集のポスターを張り出したところ、現代表理事の中込卓男ほか女性3名が応募してくれた。うち3名が理科生、1名が音楽科生であった。さらに、すぐに学生会員も増えて、上野原町から奥多摩町まで雑穀栽培を中心に、文化人類学的な調査の練習や登山の練習をした。

しかし、一方で、2年ほどして個人研究の成果が出るようになり、研究発表にあたって実質のない共同研究（共著論文）を拒否したので、職場でいじめ（今でいうパワハラ、アカハラ）に合い、助手ゆえに「サークルの顧問はできない。学生と関わるな。」などと圧力をかけられた。このいじめに屈して、自然文化誌研究会の顧問を、上司原沢伊世夫先生に依頼せざるを得なくなった。その後、いじめに同情した教授たちが、いじめ助教授が海外留学でいない隙に、お情けで講師に昇進させてくださった。これによって、学生サークルの顧問になる資格ができ、改めて、自然文化誌研究会の顧問に復帰した。国内では関東山地調査から、次に北海道の北方農耕文化調査に新天地を求めて行くことになった（1981年）。

この時期には、現副代表理事の中込貴芳や塚原東吾らが冒険探検部（もう一つの源流）を創っていた（1981年2月）。同じ志の若者たちが集まろうと小林正雄や宮本透らが合同の話し合いを続けて、東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部、愛称学大探検部になった（1985年8月）。こうして学大探検部は黄金時代を迎えたのである。創部15周年記念シンポジウム「風と人と」（1990年）には多くの大学探検部の参加を得た。加えて日本環境教育学会の創立準備の事務局を始めた。



*写真左は愛車スカイラインで北海道を3000kmは走った時の様子である。柴田一や河口徳明がいる。右が北岳にトレーニングに行った時の集合写真である。現副代表の中込貴芳や小川泰彦、初代事務局長の岩谷美苗（リーダー）、佐伯順弘、瀬谷勝頼、柴田一、宮本透らと一緒にあった。

木俣美樹男

自然文化誌研究会の関わった諸活動

1) 環境教育学習/農耕文化基本複合の教材開発



環境学習を深めるための各種教材を開発し、印刷して講義などで配布してきた。『野外学習 I』(1983)、『野外学習 II』(1984)、『野外学習 III』(1986)、『学術調査報告 I』(1987)、“A Preliminary Report of the Studies on Millet Cultivation and Environmental Culture Complex in West Turkestan”(1993)、『ELF 環境学習指導者研修会テキスト』、『ELF 環境学習過程』、『雑穀展』(2008)などを制作して、講義やセミナーで無償配布した。

2) 野外教育セミナーから環境学習セミナーへ

野外教育セミナーは 1984 年から始めて、野外教育シンポジウムなども派生させ、第 5 回野外教育シンポジウムをもって、日本環境教育学会の創立大会を行った。その後、環境教育セミナーとして、第 40 回(2018)まで実施した。このほかに、「国際留学生の集い」(1985)、「連続講演会; アジアを考える I」(1989)、「連続講演会; アジアを考える II」(1991)、「環境学習シンポジウム」(2012)などを数多く開催した。

3) 冒険学校

教育研究実践として冒険学校を始めたのは二つの主な理由があった。第一は、大学生たちの自然体験があまりに貧弱で、子供の時に体験しておかないと後追いでは得られないと考えたことである。第二は、すでに大人になってしまい、子供の頃のことを忘れてしまったので、教育学として子供を学び直したかったからである。

大学内の農園(彩色園)での実習だけでは、自然体験は不十分であるので、奥多摩地域に実習の場を探した。その中で、当時、中込卓男が五日市町の戸倉小学校で「秋川自然探検隊」という教育実践をしていたこと、宮本透の本家が五日市町にあったこと、この 2 点で、五日市町の協力も得られ、五日市青少年旅行村を借りて 3 年間(1988~1990 年)、東京学芸大学公開講座「子供のための冒険学校」を実践した。大学公開講座に子供向けを加えることに、大学本部事務局担当係長は賛成しなかったが、横で論戦を聞いていた文部省出向の若い女性主幹が認めてくださり、相応の予算を与えていただき、テントなど十分な装備をそろえることができた。この 3 年間はとても充実していたが、二つの理由でキャンプ地を移動することになった。一つは、小川泰彦らが留年してまでして旅行村内に建設した小屋があまりに立派であり、地主管理者から建築法に抵触するので撤去せよと求められ、これを理不尽だと考えたことである。この小屋は撤去した。二つは、忌まわしい事件が同時期に現地近隣地で起こったからである。このために、別のキャンプ地を求めることになったが、容易に借地できる場所がなかった。

そこで、高木文雄先生のご助力を得て、林野庁経由で秩父営林署管内の造林宿舎・大河俣小屋を借りて、小西司が中心となって改修した。重ねて、中津川キャンプ場(幸島管理)

を借りて、第4回から第13回冒険学校（1991～2000年）を秩父の大滝村で行うことになった。大滝村エコミュージアムのビジターセンターとして地区公民館を借りて富士フィルム・グリーンファンドやさんわ緑基金の助成を得て整備した。中津川キャンプ場、大河俣小屋、および民宿中津屋（山中進夫妻）、甲武信小屋・十文字小屋（山中一族）、秩父営林署他の協力を得て、非常に自然度の高い秩父山塊において、ダイナミックな野外活動を展開した。文部科学省の環境教育教員研修などもグリーンスクールで開催した。ところが、また、地元の地権争いがあり、ビジターセンターを撤去せざるを得なくなり、第14回は東京学芸大学の農園（彩色園）で、第15回は同じく「ぬくい少年少女農学校」として実施し、ここで大学公開講座としての開催は停止した。2003年以降、冒険学校は自然文化誌研究会主催で、小菅村で開催を続けることになり、ぬくい少年少女農学校は東京学芸大学の農園（彩色園）で学生サークルちえのわが引き継ぐことになった。この間に、コカ・コーラ環境教育賞（1996年）を受けた。

自然文化誌研究会の事務局は野外教育実践施設（現・環境教育研究センター）、木俣の研究室に置いていたが、同僚教授から特定NPOの事務局を施設に置くのはよくないとの強い異論があり、本多事務所を借りることになった。自然文化誌研究会が連携して、多くのプロジェクトを可能としてきたのだが、彼の正論には抵抗できずに移転した。

その後、東京学芸大学との社会連携協定により、小菅村の中央公民館に事務所を置いて、植物と人々の博物館の展示を行っていたが、これも現村長になって、耐震工事を理由に出されてしまった。現在は、木下稔理事の好意で、倉庫を借用して、村内移転している。

4) 日本環境教育学会

日本における環境教育学会の創業には自然文化誌研究会の面々が事務局として重要な下働きをしたのだが、公的な文書や書籍には事実として記述されてはいない。有名有利やメディアを避けて、地道な現場実践と自律した理論構築の作業を続けているのだが、このくには、名利を声高に言わなければ、無名非利の任意な市民活動や調査研究の成果は世間に知られず、黙殺され、無かったことになる。たとえ一時有名になっても、学問・思想すら商品とされて、情けないことに消費され、売れ残って賞味期限が過ぎればゴミ箱に捨てられる。

1974年4月から東京学芸大学職業科農学教室の助手になった。中学校職業科という教科は、他教育学部では中学校技術科（工業）に大方編成されたにもかかわらず、東京学芸大学は規模が大きかったので残存して、農学教室は主に農業高校教員、商学教室は商業高校教員の養成をしていた。教員免許職業科は残存していたが、すでに中学校ではこの教科は実質上なくなり、養護学校（現在の特別支援学校）にのみ、有効であった。いわゆる特殊教育・障害児教育には、農耕・園芸作業が機能改善に有効であるとするモンテソーリ・メソッドの影響が強かったからであろう。

文部省教育大学室長からは「職業科を廃止せよ」との行政指導が強くあると聞き、就職したとたんに「農業教育」は不要だと冷水をかけられた。年齢も大して違わない学生たちも、役立たない職業科教員免許とこの理不尽に不満を抱いていたので、何とかしようと考え出したのが、農業を基盤とした「環境教育」であった。教授たちは不賛成、助教授たちは何とか賛成してくださったので、環境教育研究会を創ることになった。事務担当として文書の草案はこの助手がほとんど作成していた。環境教育研究会は3人の助教授が唱道し

て創立したと当時の教育新聞に載った。研究会の事務作業は助手の仕事であり、研究会の準備、雑誌の編集、経理など、ほとんどの裏方を喜んでしていた。

その後 10 年ほど、環境教育研究会の事務方は続けたが、残念ながら先細りになった。代表助教授の功名心の強さが人々の集まりを阻害したのだろう。この経験から、以後心して、私利私欲と有名有利を一層戒め、マスメディアを避けて裏方に徹した。志を達成するには多くの人々の助力が必要で、ほんとうに無欲でなければ、誰も援助はしてくれないことを、大学就職 2 年目で心にしみて学んだのである。

低迷した環境教育研究会を離れて、日本環境教育学会準備会を始めることにした。前轍を踏まないように、3 年間かけて、周到に呼びかけ人を 500 名ほどに増やしたところで、日本環境教育学会を創立する戦略をとった。自然文化誌研究会が着実な地ならしをしていたのである。

また、農村開発企画委員会の石川英夫専務理事が第 1 回野外教育セミナーの開催告知（たった 2 行程度）を新聞で目にとめられ、明峰哲夫の都市を耕すが話題であったので、聞きにお越しくださり、その後とても親切に支援して下さることになった。森とむらの会を創るので参加するように誘っていただき、石川先生の紹介で森とむらの会の高木文雄会長にお引き合わせいただいた。この時から高木先生は行政学の老師となったのである。彼は大蔵次官の後、国鉄総裁など多くの役職を歴任された。もちろん自然文化誌研究会会長もして下さった。こんな偉い方と会議や研究会の後で、石橋隆明事務局長と 3 人で、奥様には内緒で、親しくビールなど飲んでいたとはだれも知らないことであった。高木先生は願いを大方聞いてくださり、先生のかばん持ちということで、多くの省庁長官・次官・局長など高級官僚にご紹介くださった。ただし、高木先生もその王道通りに、決して政治家には私をご紹介して下さらなかった。

しかし、この国は {注：漢字と平仮名は使い分けしている。私は日本くにが好きだが、国にはちょっと抗っている}、志を実現するためには、もちろん政治家と高級官僚の支援が必要だ。義父がたまたま建材業界団体の会長だったので、訳も解らずといっちは余りにも有り難かったのだが、娘婿のために当時の中曽根総理大臣の政治団体理事長に紹介してくれ、環境教育の大事さを申し上げた。遠藤理事長は自由民権運動の壮士のような風貌の方で、私が真摯に国事を思っていることだと快くご援助を約束して下さった。中曽根総理は大学（旧制静岡高校）の先輩でもあり、ご当人もご存じないところで、多分秘書が環境教育の推進に手を貸して下さったのだろう。このような経緯で、日本環境教育学会は創立に至った。高木先生のおかげで、北山財団の助成もいただいて、準備会事務局の運営もでき、自然文化誌研究会の岩谷美苗初代事務局長、小川泰彦第 2 代事務局長や小松真木子さんが手伝って下さった。こうした黒衣が水面下で誠意を尽くして働いていることは大方の人々は知りもしない。自然文化誌研究会の皆さんの協力を得て、人知れず縁の下の作業員である事務局（企画調整）担当として、日本の環境教育学会を創業した（1990 年）。もちろん、世間向けに会長は偉い方々になるもので、沼田真先生にお願いした。



野外教育シンポジウム、上；正門の案内看板、中；INCH メンバーによる開会の挨拶や司会、下；石川英夫先生の講演。

5) 雑穀研究会

自然文化誌研究会は創立当初から、雑穀栽培と調理に関するフィールド調査研究を主課題にしてきた。このために事務局として雑穀研究会を創立した（1988 年～2003 年）。阪本寧男先生に会長を引き受けていただいた。『雑穀研究』の発行、シンポジウム・研究会の開催準備などをしてきた。特に、第 2 回シンポジウムや家庭栄養研究会・雑穀シンポジウムは東京学芸大学、第 3 回シンポジウムは上野原町、第 16 回と第 26 回は小菅村で開催した。

6) 自然文化誌研究会の NPO 法人化

財団法人化することは頓挫したので、東京都の担当職員廣島照久さんの勧めで、NPO 制度ができてすぐに、中込卓男代表理事で東京都に登録をした（2004 年）。

7) タイ・日本自然クラブ

タイから環境教育視察団が来訪し（1994 年）、翌年に UNESCO の講師としてタイに呼ばれ、ラダワン・カンハスワン先生と意気投合して、ラジャバト・プラナコン大学大学院の客員教授を引き受けた。以後、相互交流を深めて、タイ・日本自然クラブを創り、大学間でも学術及び学生交流協定を結んだ。中込メ、中込ミがその後、タイのパンダキャンプと毎夏、合同キャンプを続けている。



8) エコミュージアム日本村

大滝エコミュージアムの発展を求めて、このくには日本村がないので、小菅村の長老方の賛同を得て、エコミュージアム日本村を始めた（2005 年）。青柳諭、亀井雄次ら村民有志とミュージアム研究会を作り、学習会を続けた。日本の山村に伝承されてきた伝統的知識体系を学習し、環境保全・創造する活動を通じて、持続可能な地域社会を形成する市民活動である。山住の縄文文化の系譜を受け継ぐ山村の暮らしから地域社会の社会的共通財、自然や生業の在り方を学ぶ。学校で伝達される科学的知識体系に、山村で体験する伝統的知識体系を加えて、自ら学び、調和の取れた世界観を鍛錬する。植物と人々を巡る伝統的智恵を受け継ぎ、秩父多摩甲斐国立公園内での山村振興モデルを提案する。この間、三菱UFJ 環境財団寄附講座助成、東急環境財団助成、森林環境基金助成等を受けて、冒険学校やログキャビンづくりなどを実践活動や研究プロジェクトを行ってきた。



9) 植物と人々の博物館

ミレット・コンプレックス創立（2003 年）、中川智、守屋秋子、岡部良雄らに伝統知顧問を依頼して雑穀栽培講習会を開始した。ミレット・コンプレックスを植物と人々の博物館に改称し（2006 年）、エコミュージアム日本村のコア博物館として、自然文化誌研究会のプロジェクトに位置付けた。東京学芸大学との社会連携協定に基づき、小菅村中央公民館に置き、小菅村の民具整理とその展示を中心に作業を進めた。環境教育研究センター、環境デザイン研究室、文化財修復研究室などの協力で、学部生、院生の実習の場としても活用した。館長は小菅村の長老、加藤増夫、木下善晴に順次依頼した。研究員は数名の専門協力者に依頼した。安孫子は顧問研究員、木俣は専任研究員とした。担当理事は西村俊、黒澤友彦事務局長、宮本透運営委員、井村礼恵運営委員である。

生物多様性条約締約国会議（2010 年）COP10 においては、「タネと人々の未来作業部会」として、NPO 団体、名古屋大学、筑波大学の研究者らとポジション・ペーパーを提出し、ブース展示も行った。



小菅村の雑穀栽培見本園、上野原市西原の雑穀栽培農家



10) 雑穀街道普及会

FAO 世界農業遺産とは、伝統的な農業と、農業によって育まれ、維持されてきた、土地利用（農地やため池・水利施設などの灌漑）、技術、文化風習、風景、そしてそれを取り巻く生物多様性の保全を目的に、世界的に重要で、持続可能な農業の実践地域を FAO（国連食糧農業機関）が認定するものである。FAO も大いに反省したのか、大規模農業の称揚のみから、小規模家族農耕の重要性を強調するようになった。日本ではほとんど無視されてしまったが、2014 年は国際家族農業年であったようだ。FAO 世界農業遺産は、第一に、先祖の生業の歴史、暮らしの基層にある伝統的知識や技能を受け継ぐ責任と誇りである。観光客が増えるとか、助成金がもらいやすくなるとか、これらお零れは二の次のことである。学術的な内容保証が求められてもいるが、現実には行政主導でその担保がなくてはならない。

自然文化誌研究会の成果に基づいて、雑穀を栽培する生物文化多様性が日本でもっとも豊かに保たれてきた地域、多摩川水系の丹波山村、小菅村から相模川水系の上野原市、相模原市緑区までをつなぐ道を、雑穀街道と呼ぶことにした。この雑穀街道に沿って、今も雑穀など作物在来品種を多様に栽培している山里が多くある。山女魚養殖を初めて成功させた小菅村橋立、穀菜食による健康長寿で世界に知られた上野原市桐原、トランジション・タウンで知られた相模原市藤野などが続き、FAO 世界農業遺産に認定を受けるにはふさわしい地域と言える。縄文時代中期の勝坂式土器片が畑から出てくる。安孫子昭二顧問研究員は縄文土器の専門家である。

2014 年、雑穀標本を小菅村に移動、ローカルシードバンクを藤野に設置。第 34 回環境学習セミナー／小菅で雑穀街道の提唱。種市、藤野で雑穀街道の講義。2015 年、展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。雑穀街道展示、藤野倶楽部結びの家。雑穀料理教室、藤野倶楽部結びの家。生物多様性アクション大賞審査員賞。2016 年、展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。自給農耕ゼミ 7、藤野。上野原市保健センターで、雑穀街道の講義。自給農耕ゼミ 8、藤野。小菅村長および上野原市長に雑穀街道の提案。農水省環境保全官を訪問。2017 年、東京都公園協会講座で雑穀街道提唱・講義。関東農政局環境保全官を訪問。雑穀街道普及

会の賛同者募集開始（伝統知シンポジウム＝第 39 回環境学習セミナー／藤野、エコ・プラスと共同事業、森林基金助成）。展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。

2018 年～2020 年、行政担当者に趣旨説明。2021 年、雑穀街道普及会の創立、上野原市長や相模原市長に面会して、趣旨説明をする。2022 年、桂川・相模川流域協議会で趣旨説明。2023 年、雑穀街道普及会は多くの方々や団体による協力があつたにもかかわらず、地域行政や地元市民などの関心を得ることが十分にできなかった。国際的には FAO のウェブ・セミナーでも日本の事例として発表を依頼された。国際雑穀年であつたにもかかわらず、国内の関心を得ることができずに、また、地域社会の生活文化に対する誇りの喪失、私利私欲および個人的名誉欲に阻害されて、目的の実現が困難であると判断して解散することになった。

11) 環境学習市民連合大学

日本村塾は 2012 年から試行を始めた。学びたい人々が学びの本質を探り、互いに学び合いたいと考えた。不定期に、自給農耕ゼミ、扶桑こくゼミ、民族植物学ゼミ、環境学習会などを実施してきた。さらにこれを進めて、ネット上で「大学」を創ることを考え付いた。

市民社会の自由、平等、友愛を基本原則として、自らが環境を学び合う市民連合大学を、市民による環境学習の普及、深化を目的としてインターネット上に創立した（2021 年）。原初の大学は学び合いたい人々が存在するだけであつた。学ぶ意味や大学について改めて考え直したい。入学資格、試験、授業料、卒業資格はない。大学の芽生えは、12 世紀ルネサンスの先駆けとして、社会の基礎を造った。人新世に再びルネサンスを起こしたい。運営協働団体及び個人：小金井環境市民会議/環境学習部会、NPO こがねい環境ネットワーク、NPO 自然文化誌研究会/植物と人々の博物館、NPO 環境文明 21、福田恵一、渡辺隆一、木俣美樹男。

12) 財団法人森とむらの会との連携

この会は、森林、林業、木および山村が、国土の保全、国民経済の均衡ある発展、良好な生活環境・自然環境の形成、健全な社会文化の育成など多面的かつ重要な機能を有することに鑑み、これらに関する諸問題を、経済、社会、文化、科学技術、国土利用、人間生活などの各視点から、総合的、実態的に探究するとともに、その成果を広く国民に普及啓蒙することにより、緑豊かな国土の育成と国民生活の向上に資することを目的としていた。

この会の高本文雄会長は、自然文化誌研究会の会長も引き受けてくださっていたので、いろいろなご援助をいただいた。日本環境教育学会創立、JT クロスカルチャー大賞による中央アジア学術調査隊もご支援を受けた。自然文化誌研究会は、森とむらの会の志を受け継ぐべく、財団解散に当たって、全ての資料を預託されたので、これらは植物と人々の博物館に収蔵している。なお、関連書籍は NPO さいはらに貸し出している。



森とむらの会、檜原村の林業視察旅行：高木先生を囲んで、田中惣次さんほか、林野庁幹部、大林業家ほか。

13) 東京学芸大学との連携

日々の研究や講義、会議に加えて、プロジェクトなどを実行するには大学の教職員はあまりにも少ない。このために、自然文化誌研究会や市民活動団体との連携は、とても有効であった。こうした団体や市民がいたから、現在の環境教育研究センターが創業でき、彩色園（旧農場）も守り、有効にコモンズとして活用できた。

環境教育研究センター（現在の名称）の創業にあたって、環境教育学会づくりは戦略的な必要性によるもので、第二義的であり、本来、第一の意義は新たな学問、環境教育学の構築であった。農業教育は不要との中央政府の政策により、当時の文部省教育大学室長から附属農場（学則、学内措置）廃止の強い行政指導があった。学内からも、駐車場、サッカー場、第2附属高校、小金井市からは廃棄物処理場にせよとの提案が続いてきた。

農業関係の諸先輩にも助力を求めたが、彼らも農業技術や行政に携わる人たちで、農業教育の必要性を認めてくれなかった。いまだに、林業関係者に比べると、農業関係者は一般教育としての農林業に冷淡だ。孤立無援であった。そこで、農業学習を主要な基礎とする環境教育学の構築へと発想を変えざるを得なかった。農場を守るために、環境教育施設に改組する概算要求を続けた。この過程で、高本文雄先生ほか多くの方々の助力を得て、改組は認められ、附属野外教育実習施設（文部省令）が創立できた。文部省側は「環境教育実習施設」を認めず、名称を「自然教育実習施設」にするように指示してきた。抵抗の結果の妥協点が「野外教育実習施設」の名称である。その後、さらに改組拡充の概算要求を続けて、「環境教育実践施設」になった。この間、他大学では、農場から「〇〇環境教育センター」への改組が続いた。教育学部農学関係の先輩方からは、けしからんと言われていたが、結果的には他大学にも波及して全国で数か所の農場を環境教育センターへの改組の方向で守ったことになり、後に「君は良くやった」とお礼を言ってくださる方も少しはあった。現在では、多くの学生、生徒、教職員、市民が彩色園（農園）を活用してくださり、人知れず満足している。

「環境教育推進法」のことを記録しておきたい。せっかく、日本環境教育学会も創立し、2,000名の会員を迎えたが、この10倍の20,000人の会員を獲得して、日本医師会ほどの影響力を持たないと、日本の環境問題を解決に導き、「受験体制」教育の在り方を良い方向に変えられないと考えていた。でも、そのようには発展しなかった。学会の運営から外れて、第一義的に重要な環境教育学の核心である「環境学習原論」の構築に専念して

いた。そこで、第三義的な戦略として、環境教育推進法をアメリカに習い日本でも制定して、環境教育の発展を期すことにした。環境文明 21 の藤村コノエ代表に助力を求め、一緒に国会議員に請願するロビー活動をした。学習会やシンポジウムに多くの国会議員も参加してくださり、超党派で議員立法されることになった。参議院本会議の議決まで傍聴に行き、3名の反対があったが圧倒的多数で法案は成立した。NPOによる提案が議員立法されるのは、民主主義のもっともな道筋だ。

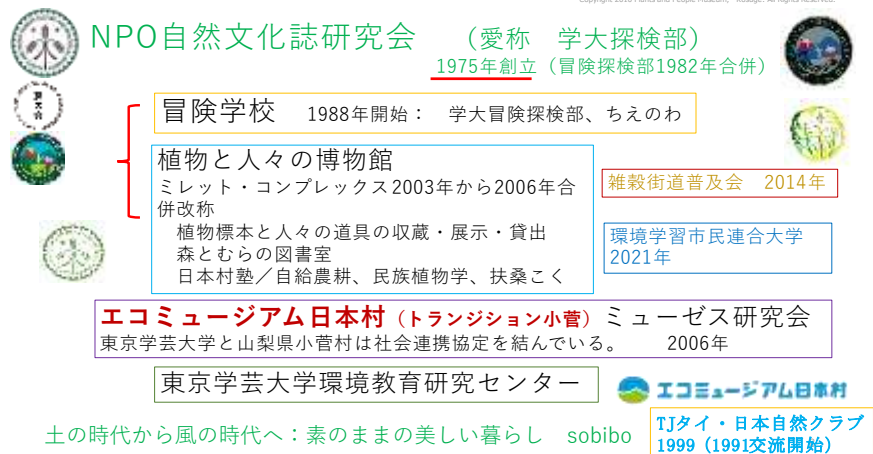
ここに至るまでに、日本環境教育学会の運営委員会に、私はすでに1会員に過ぎなかったにもかかわらず、呼び出されて、「環境教育は法になじまない。怪しからん考えだ。」などと、お説教を受けた。しかし、成立してしまえば、そのような意見は忘れ去られ、お説教なされたご本人たちも、自分たちの成果のようにふるまい、活用せよとばかりに変節してしまった。最初の提案者が誰かは文部科学省や環境省の有力者も知っていたはずだ。したがって、具体的に運用する委員会に呼ばれ、とても忙しくなることを恐れたが、まったくお呼びはなく、提案者の趣旨は黙殺された。第一義、学者として暮らす自分の時間を失わずに済んだので、結果良しなのだが、とても不条理を感じた。環境省が閣法として提案できずにいたので、渡りに船と議員立法に乗り移り、換骨奪胎しようとしたのだろう。

14) 山梨県小菅村との連携

自然文化誌研究会が関東山地における雑穀栽培と調理の調査研究を始める切っ掛けは、山梨県上野原町桐原が小守豊甫医師の長寿村研究に触発されたからである。1972年頃、阪本寧男先生が風邪を召して、三島の国立遺伝学研究所研究補助員の実家尾上医院に視察を受けに行った際に、『健康医学』誌に雑穀で長寿の村があることを読んだからである。東京で就職するのなら、この地域で文化人類学調査のトレーニングをせよとの教唆を受けたことによる。ここから、定点調査研究の地域としてお付き合いが続いてきた。古守豊甫医師や降矢静夫師からは親しく教えを受けた。著作や書簡は収蔵してある。

井村礼恵は小菅村の「すげのこ祭」にて、1996年から学生実習を始めた。雑穀・蔬菜の在来品種の追跡調査（1998年、住友環境財団助成）、「のびと講座」の開催（2002年）、ミレット・コンプレックスを開始（2003年）、主たる活動拠点を小菅村に定め、雑穀栽培講習会を開始した（2004年）。文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム「持続可能な社会づくりのための環境学習活動～多摩川バイオリージョンにおけるエコミュージアムの展開」（2005年）が採択されたので、小菅村でミューゼス研究会を、村民を中心に組織した。ヒエ焼酎の試作を笹一酒造に委託した。小菅の湯レストランにて、雑穀メニュー、雑穀クッキーなどの商品化を試みた（小金井夢基金助成）。

第1回多摩川流域エコミュージアム・ネットワーク・シンポジウムを開催、エコミュージアム日本村/植物と人々の博物館づくりを構想して、中央公民館に整備を始め、東京学芸大学と社会連携協定を結んだ（2006年）。第2回シンポジウム開催、特別展示「雑穀展」を開催した（2007年）。第3回シンポジウム（2008年）、特別展示「インドの雑穀と生活文化」・「山村を支えた養蚕」を開催、雑穀発泡酒「Sobibo ピーボ」を開発、日本エコミュージアム研究会第15回全国大会を開催した（2009年）。雑穀研究会シンポジウムを開催した（2012年）。



まとめ

この様に、現場で自ら働き、かなりの仕事を成したと自負しているが、現実には黙殺されてしまった。民主主義の時代で、暗殺こそされなかったもので、それでも良しとせねばなるまい。自己の名利を言いつのり、売り込まないので、仕事量の割にはあまりに無名である。それで個人として子供の頃からの信条だから構わないが、自然文化誌研究会のせつかくの膨大な成果が正当な評価を得ず、趣旨が世間を良くするために普及していないことのみがまことに悔しく、無名は無力に等しいこの国の先行きが悲しい。

環境教育実践施設は、やっと名称変更して、環境教育研究センターになった。国立大学が法人化されたので、名称は文部科学省令による必要がなくなったからだ。20人規模の研究所にしたかったが、大学幹部からは「あんたは頭がおかしい」と一蹴された。しかし、引退して3年ほどたつが、いまだに数多くの環境・教育課題が解決していないばかりか、さらに深刻化しているにもかかわらず、環境・教育を学ぶ意味が深く探求されなかったことに、とても無念を感じている。意味・信念あるいは思想・信条がなければ、人の行動は浮動し続ける。家庭や地域社会、この国や地球規模であれ、自然環境のうえで暮らす私たちにとって自然や生業の教育はもっとも基礎的な学習行動だ。不登校が10万人以上、自殺者が3万人前後、高い地位にある人や学歴ある人の犯罪も少なくない。教育関係者は猛省し、職業的誇りを回復して、社会を改善するため、本気の「教育学原論」を求め、子供たちに向き合ってほしい。

外見流行と内面不易を対比させて、環境・教育関連の教育・研究組織の創業、環境教育推進法の成立の顛末を、個人史的事実として記録しておきたい。第四紀人新世が幸せな時代になるようにするには、せめても環境学習を再生し、心の構造と機能を築き直さねばならない。進化の基盤である自然知能Ninの再生はAIでは代替できない。いずれ近い機会に、再認識することになるだろう。第四紀人新世はカリ・ユガの時代なのであろう、まっとうに暮らすだけで、修業になるとカラス仙人は言った。



興農学園農場跡の石碑” Boys be ambitious.”

自然文化誌研究会創設の頃

ヨボ爺は過去の成功を自慢し、失敗を愚痴りたくはない。世間の流行に抗って、不易を求めて生きてきたが、未来の明るい希望を創りたい。誰かの記憶ではなく、公共に正直な記録を残して置きたい。マスメディアや世俗的な地位や評価を忌避してきた。有名人ではないので、世間の人々にはもう話は聞いてもらえないが、自由を引き換えにした人生ではないので、幸福なヨボ爺である。

中込メさんらが応じてくださり、自然文化誌研究会（学大探検部）が発足した。僕は学大では非公式に、民族植物学研究室を名乗っていて、学部生、研究生、修士院生、博士院生など、40年間に150人ほどを受け持った。自然文化誌研究会 INCH にも重ねて加わっていたのは、その学生のほんの一部にすぎない。講座制大学ではない課程制大学では個人名研究室しかない。他大学は学問名の研究室・講座名である。研究室は個人のものではなく、複数の教員と学生たちとで構成しているのだから、個人名研究室で呼ぶのは嫌いであった。

学問研究は研究室として行っていたもので、INCH として行った調査はその一部である。たとえば、西村さんも同行した内蒙古調査は院生の卓さんの調査を手伝ったものである。学大では学術調査隊は構成困難で、僕は、大方は他大学の学術調査隊に参加してきた。INCH として進めたのは関東山地調査、北海道調査、中央アジア調査くらいだ。その中央アジア調査隊も、ドタキャンした小西さんが学生隊員を大方決めたので、正直に言って、まあまともだったのは日比野さんくらいだった。中込ミさんが加わってくださったのは助かった。

森とむらの会の高木会長は INCH の会長でもあったので、ロシアに詳しい石橋事務局長を同行させてくださり、賞金に加えて調査助成もしてくださった。日本ウズベキスタン交流協会からは多大の便宜を受けた。僕個人はキビの学術研究においてとても大きな成果を得た。

部室は元陸軍研究所の研究室で、敗戦後、学大の敷地になり、農学教室の講義室として数年間は豊田先生と僕はここで講義をしていた。農場管理棟ができ教室を新棟に移したので、そこで、僕の一存でこの部屋を INCH に貸したのだ。

その後、野外教育実践施設（現環境教育研究センター）が省令化してからは、INCH 事務局は民族植物学研究室に置いた。環境教育学会創立作業も岩谷さん、小川さん、小松さんに、膨大な事務作業を一緒にしていただいた。INCH の皆さんの援助で、たくさんのプロジェクトが進行できた。

環境教育の公開講座は同僚にお願いして、冒険学校を始めた。冒険学校は僕が子供を知りたかったことで始めた。同時に、探検部学生の野外訓練、チーム運営の練習でもあった。五日市小屋づくりで、小川さんは留年した。ここは中込さんの教育実践の場、宮本さんの本家がある場所であった。ありがたいことに文科省出向の主幹女性の厚意で、大学公開講座にできたので、助成も多くもらい、野外装備が充分に揃えられた。卒業生も教育実践を蓄積しており、多くの現職教員、探検部学生も参加協力くださり、この公開講座は有能な多くの有能な教員、探検部の若者たちにささえられて、五日市、大滝村と 10 余年ほど続けた。これで、環境学習理論、エコミュージアムの基礎理論ができた。北海道の調査は第 1 次 80 年代、第 2 次 90 年代（森とむらの会委託）に行い、五日市冒険学校は二風谷冒険学校にも展開した。

農場の管理運営を、農業技術の実習から環境学習に変えたのは、野外教育実践施設として省令化され、年間運営費がもらえて、農産物の販売をして農園経営する必要がなくなったからである。これで、中込ミさんから学んだビオトープ化を進め、彩色園（旧農場）を市民へ開放する方向に進めたのである。

タイとの関係の始まりは、先方の教育研究所から視察団が UNESCO 関連で訪問され、翌年、僕が UNESCO の講師としてタイに招聘されたことに始まる。さらに、ラダワンさんに出会って、ラジャバト大学大学院で非常勤講師をすることになり、6 年ほどタイに通った。そして、タイ・日本 T J 自然クラブができ、中込メ・ミさんらが継承・発展してくださっているのだ。この間、森林基金などの助成で国際シンポジウムを行い、その評価が UNESCO アジア・太平洋環境教育セミナーにつながった。ちなみに植物と人々の博物館の整備、清水バンガローのログの建設資金は当初は、国土緑化推進機構森林基金からの助成である。

学術研究と教育実践がつながり、成果が蓄積されてきて、生活科、総合的学習、（最近では探求学習）などは、この成果がとり入れられていると思う。当時の中野主任視学官からはそう言われた。



元陸軍の研究所跡を研究室・教室として用い、順次、サークル長屋として貸した。僕はここで農場実習の講義をした。その後、自然文化誌研究会に部室として貸した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

出版物

多数あるので、皆さんに合わせます。